

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19971

研究課題名（和文）近世・近代東アジア思想圏における医書研究 『傷寒論』の受容・展開・還流を中心に

研究課題名（英文）A study of traditional medical books in East Asia in the early modern and modern periods: Centering on the acceptance, development and return of the Shang Han Lun

研究代表者

向 静静 (XIANG, Jingjing)

立命館大学・立命館アジア・日本研究機構・研究員

研究者番号：30910682

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世・近代東アジアにおける中国古典医書の受容・展開・還流の実態を解明したものである。具体的には、後漢の医家・張仲景が伝染病治療法を論じた『傷寒論』を事例に、これをめぐる解釈が日中間でいかに受容・展開・還流したのを追うことでこれを行った。これは概して西洋近代医学との関係性で論じられてきた日本医学史研究を東アジアとの関係という視点から読み直す試みである。

本研究では特に近世中期から日本医家らの間で発生した『傷寒論』の註解ブームを明・清代医学からの影響や日本古学派儒者の思想的影響、及び麻疹・痘瘡・腸チフス・風邪といった疫病に注目しつつ検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、近接諸分野での成果を活かしつつ、『傷寒論』の受容・展開・還流という観点から、医学史と思想史との間に横たわる研究的棲み分けを越えた点に、学術的意義を有する。

また、近世日本医家たちの思想を読み解くことで、中国医学が近世日本において遂げた展開を追うとともに、この思潮が現在の漢方医学に連なっていく過程も明らかにした点に、社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the acceptance, development, and return of traditional Chinese medical texts in East Asia in the early modern and modern periods. Specifically, this study used the case of the Shang Han Lun (Treatise on Exogenous Febrile Disease), a medical book about infectious diseases by the Later Han physician Zhang Zhongjing. This study traced how Shang Han Lun was accepted, developed, and returned in East Asia. This is an attempt to reread the study of Japanese medical history, which has generally been discussed in relation to modern Western medicine, from the perspective of its relationship with East Asia. This study examined the boom in commentaries on the Shang Han Lun that began among Japanese physicians in the mid-modern period, focusing on the influence of Medicine during the Ming and Qing Dynasties, the influence of Japanese Confucian scholars, and epidemics such as measles, smallpox, typhoid fever, and the common cold.

研究分野：医学思想史、東アジア医学交流史

キーワード：古方派 復古 『傷寒論』 儒学 後藤艮山 香川修庵 山脇東洋 吉益東洞

1. 研究開始当初の背景

戦後日本における医書研究は、近代西洋医学を到達点とする発展史観・近代化論的な叙述がなされてきた。そこでは近世東アジアにおける学問の基盤たる儒学の有した意味が、「非科学的」として閉却されてきたといえる(宮本忍『医学思想史』1975)。しかし、近世東アジアにおいて、様々な学問基盤は儒学にあり、医家も儒者との人的・学術的なネットワークを持ち、儒者の影響を受けつつ医学研究を進めていた(海原亮『江戸時代の医師修業』2014)。それにもかかわらず、こうした思想的背景を含めて医書研究を検討する作業はほとんどなされていなかった。これに対し研究代表者は、古方派を中心に近世日本における医書研究が、東アジア儒学圏のなかに位置付けられることを明らかにしてきた(立命館大学博士論文「『復古』と医学——近世日本医学思想の研究」2020)。では、こうした背景をもつ近世古方派の医書研究は、その後、どのような展開を見せたのであろうか。また、近世から近代への時代を経て、いかなる変容を見せたのであろうか。また、古方派を批判的に継承した医学考証派の『傷寒論』研究は、社会との接点を重視していたこと、ゆえにその研究は流行病への実践的模索であったことが指摘されている(富士川游『日本疾病史』1912)。ただし、たとえば彼らが『傷寒論』をいかに現実の疾病に応用したのかを具体的に追う作業は、十分なされていなかった。また、近世日本の『傷寒論』研究は、明治政府の西洋医学への傾斜により、後継者を失っていった。他方、駐日清国大使や中国人留学生が、近世日本の古方派・医学考証派の『傷寒論』に関する研究書を中国へと持ち帰り、近代中国の医書・医学研究に大きな影響を与えていく(張蒙「国家医学的視角」2021)。すなわち、彼らの研究が及ぼした影響は近代に及ぶのであるが、この具体的様相は十分解明されていなかったのである。

2. 研究の目的

本研究は、近世日本の『傷寒論』研究を、近世・近代の東アジアを考察範囲として、その受容・展開・還流という観点から東アジアにおける医学史・思想史を再検討することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の基本的な研究方法は、文献資料の蒐集・読解・検討であった。具体的には、中国・日本で完成された『傷寒論』関係書を中心とする医家らの著作、医書の検討、また日本における医書の還流に関わった駐日清国公使、来日した中国人学者・留学生、日中商人の史料を横断的に用いた。それにくわえて、このほかの知識人らによる刊行・未刊行の著作や、随筆・治療録・医学雑誌・新聞・日記といった史料を、近接領域(医学史・薬物学史・社会史・政治史等)での成果をも活かしつつ、包括的に用いた。またフィールド調査も行った。

4. 研究成果

本研究は具体的に、後漢の医家・張仲景が伝染病治療法を論じた『傷寒論』を事例に、これをめぐる解釈が日中間でいかに受容・展開・還流したのを追うことでこれを行ってきた。これは概して西洋近代医学との関係性で論じられてきた日本医学史研究を東アジアとの関係という視点から読み直す試みであった。

ここから得られた成果は、以下の5点に集約される。

(1) 近世日本において、医学と儒学がいかなる関係を有したのかを解明した。すなわち、近世中期における『傷寒論』への注目は、当該期の儒学全体に影響を与えた朱子学批判に伴う儒学の変容に大きく関係している。古方派医家らの医書研究・医学活動を素材に検討を行った結果、彼らの医学は、中国古典医書のみならず、『論語』『孟子』『周礼』『尚書』といった儒学の経書、日本古学派儒者らの影響下で営まれていたことを明らかにした。その成果を単著『医学と儒学——近世東アジアの医の交流』(人文書院、2023年)としてまとめた。

(2) 東アジア儒学全体の動勢に目を配ることで、明清医学と近世日本医学の関係を解明した。東アジア、特に明清中国と近世日本の間には、医家・医書・医学情報の移動が発生していた。明代の中国に渡った日本の医家は、当時の最新の医学書や医学情報を日本に紹介し、近世前期の医学に大きな影響を与えた。一方、明清交替期に戦乱を避けるために来日した医家があり、徳川吉宗の招聘により、明・清代の医学先進地であった浙江・蘇州・福建といった地域から医家が来日して日本で診療活動を実施し、薬草の採集・医書出版に携わったりして、日本の医家との緊密な交流が存在した。医書がもたらした思想的影響はもちろん、このような越境する医家が近世日本における医学の発展に果たした役割も大きかった。

(3) 近世日本における『傷寒論』受容史と流行病の関係を解明した。医家らは、机上の空論をもって、『傷寒論』に註解を施すのではなく、『傷寒論』のなかに当該期の流行病に対応し得る記述を探ろうとしていた。彼らが金元医学を批判したのも、疾病の流行や薬物不足といった目前の事

態に対し、「温補」治療法や、難解な医学理論が必ずしも効用を発揮できないことに由来していた。すなわち、医家らが『傷寒論』に注目した背景には、当時蔓延していた梅毒・痘瘡・麻疹・熱病・脚気・コレラといった疾病、またその治療法をめぐる模索があったのである。このように、研究代表者は従来の『傷寒論』受容史において看過されてきた問題、すなわち近世日本における流行病とこれへの対応という視点に立ち、医家らによる医書や治療録を史料として用いて、彼らがどのように病を捉え、これに対していかに『傷寒論』を応用したのかを考察した。その成果を論文「近世日本における『傷寒論』と漢方医学：麻疹・痘瘡・腸チフス・風邪の治療から」『立命館アジア・日本研究学術年報』（第3号）としてまとめた。

(4) データベースの作成。すでに「近世日本医学史年表」「医家・儒者の生没年一覧」「香川修庵『一本堂葉選』の目録」「香川修庵『一本堂行余医言』に引用された中国の典籍」「近世日本における『傷寒論』関係書渡来目録」などを作成した。現在、今まで収集した未刊行資料を含めて「東アジアにおける『傷寒論』関係書目録」を作成しているところである。

(5) 近世日本の『傷寒論』などの医学書が近代中国の医書・医学研究に与えた影響について解明した。明治以前の日本で発展した医書研究は、明治政府の西洋医学への傾斜により、日本では後継者を失っていった。他方、駐日清国大使や中国人留学生が、近世日本で完成された漢方医学書を中国へと持ち帰り、近代中国の医書・医学研究に大きな影響を与えた。例えば、近代中国の医家である陳存仁（1908～1990）は、日本に渡って93種類の日本の漢方医学書を収集し、『皇漢医学叢書』として1936年に中国で上梓した。そこには吉益東洞の医書、北山友松子の『北山医案』、多紀元簡の『傷寒論』研究書といった近世日本の医書が収載された。すなわち、近世日本の医家による医書が中国へと環流し、中国の医家に影響を与えたのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 向 静静	4. 巻 3
2. 論文標題 近世日本における『傷寒論』と漢方医学：麻疹・痘瘡・腸チフス・風邪の治療から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『立命館アジア・日本研究学術年報』	6. 最初と最後の頁 17,30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 向 静静
2. 発表標題 『傷寒論』の「日用」 近世日本の流行病と治療
3. 学会等名 東アジア思想文化研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 XIANG Jingjing
2. 発表標題 Transplanting Chinese Medicine in Early Modern Japan: Immigrant Doctors in Nagasaki and the Flourishing of a Japanese Clinic in Osaka
3. 学会等名 19th Asia Pacific Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 向 静静
2. 発表標題 近世日本における「医」にめぐる論争：「儒医」「陰陽医」から
3. 学会等名 東アジア文化交渉学会 第14回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 XIANG Jingjing
2. 発表標題 Knowledge Transfer and Innovations in Primordialist Thought : New Reflections on the Kohoha School in the Edo Period
3. 学会等名 1st Int'l symposium on Kampo Medicine (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 XIANG Jingjing
2. 発表標題 The Influence of Kampo Medicine in the Edo Period on Modern China:Centering on the Return of the Shang Han Lun
3. 学会等名 20th Asia Pacific Conference
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 向 静静
2. 発表標題 近世日本における医学の「復古」と革新・創成--古方派「四大家」から
3. 学会等名 第123回日本医史学会総会・学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 向 静静
2. 発表標題 朝鮮人參ブームへの批判 香川修庵の『一本堂薬選』を中心に
3. 学会等名 第124回日本医史学会総会・学術大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 向 静静	4. 発行年 2023年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 344
3. 書名 『医学と儒学 近世東アジアの医の交流』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

立命館大学 研究者学術情報データベース https://research-db.ritsumei.ac.jp/rithp/k03/resid/S002364javascript: onSave()
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------